

## 山陰地方における弥生時代の墓制～弥生時代後期を中心に～

松井 潔（財団法人鳥取県教育文化財団調査室）

### 山陰地方の墳丘墓の特性（表）

山陰地方の墳丘墓の特性は、四隅突出型墳丘墓は通時的には全体の半数弱だが、出雲地域で王墓と呼ぶに相応しい大型の四隅突出型墳丘墓が築造され始める 5 期以降に限ると約 6 割を占める。即ち、「山陰地方の墳墓＝四隅突出型墳丘墓」という概念は 5 期以降にこそ相応しいといえよう。また、大型の墳丘墓は潟湖を見下ろす立地が多いのも大きな特徴である。

**因幡** E 地域では、C 地域では認められない重層的な首長墓の系列を辿ることができることが大きな特徴である。また、B 地域と D 地域の墳丘墓群で築造方法、埋葬施設上への土器破碎供献等、北近畿の墓制との親縁性が認められることも特徴である。

**伯耆東部** F 地域と H 地域の墳丘墓は、①両地域とも 4 期までは原則として四隅突出型墳丘墓だが、5 期に平面方形の墳丘墓に転換、②H 地域では墳丘墓の主体部に副葬品を伴わないが、F 地域では多量の玉類や鉄製品が出土、という差異が認められるのが特徴である。F 地域がこうした多彩、多量の副葬品をもつ理由の手がかりが棺形式にある。少なくとも三主体で用いられた舟底形木棺は丹後の首長墓で採用される棺形式なので、北近畿の有力首長と親縁な関係を持っていたことが窺われる。

**伯耆西部** 伯耆西部では L 地域と M 地域で多くの墳丘墓が築かれる。特性は、①M 地域の洞ノ原墳丘墓群では中期末にあたる 1 期に突出部の未発達な四隅突出型墳丘墓が出現、備後系の供献土器が出土するので、山間地から沿岸部への四隅突出型墳丘墓の拡散に際して日野川が経路となったとみてよい点、②L 地域と M 地域の墳丘墓には高地性の環壕集落が隣接する立地において共通性があり、この地域では集団間の緊張関係を契機に首長への一層の権力集中が進行していたことを窺わせる点、③四隅突出型墳丘墓が墳丘墓の形式としては継続せず、概ね 3 期ないし 4 期を境に（長）方形プランの墳丘墓に変化する点があげられる。

**出雲東部** 能義平野では、飯梨川下流左岸の独立丘陵や尾根上に、5 期以降の大型の四隅突出型墳丘墓が累代的に築造される一方、伯太川流域では、独立山塊の城山や丘陵上を中心に 2 期以降の平面形態が方形、不定形で小規模な墳丘墓等が築造される。前者の地域での大型の四隅突出型墳丘墓の築造開始を能義平野の地域集団における階層社会の顕在化の結果と考えると、従来の墓域である後者の地域から四隅突出型墳丘墓の立地を分離することで、権力の隔絶化を図ったのではないかと考える。

**出雲西部** 出雲西部でも 5 期以降、簸川平野を眼下に望む西谷丘陵上に大型の四隅突出型墳丘墓が累代的に築造される。うち西谷 3 号墓（5 期）は、埋葬施設の構造、副葬品及び供献土器の質、量で他の墳丘墓を圧倒する。供献土器には北近畿系の土器が一定量含まれる上、第 4 主体の供献土器の中や墳丘の周辺からは、特殊器台、特殊壺の破片も相当量見つかっている。

一方、丘陵下の簸川平野では、沿岸部最古の四隅突出型墳丘墓、青木 4 号墓を起点に青木遺跡、中野美保遺跡で小規模な四隅突出型墳丘墓が後期後葉まで継続的に築造される。山陰地域の中では唯一この地域だけが、四隅突出型墳丘墓を一貫して築造し続ける中で後期中葉以降階層性が顕在化し、王墓たる属性を備えた四隅突出型墳丘墓が丘陵上に隔絶化された。

なお、研究集会で報告した弥生後期墓制の階層性については、紙幅の都合で図を掲載するにとどめ本文は割愛する。



